

「をちこち散歩」は2人の筆者が6回連載します。

そ せっかしいのか運動神経の鈍さのせいか、私はしょっちゅう転ぶ。歩いていても、自転車に乗っていても、転ぶ。バリ島のウブドでも転んだ。

濃い日差しが膚を焼く午後だった。朝からあちこちを回って体力を消耗していた私は、急な坂道をよくよるとペダルを漕いでいた。ふと、アスファルトが照り返す太陽の熱に意識が曖昧となり、次の瞬間には自転車ごと真横に倒れていた。やっと起き上がると、目の前の茶店の看板に「バリ舞踊教えます」と書いてあるのが目に入った。

バリに来てから、ほとんど毎晩あちこちで催される地元の歌舞団による舞踊を観に行っていたのだ

った。地の底から響くようでも、押し返す波のようでもあるガムランの音色と、金や鮮やかな色彩の衣装を纏った踊り手たちが繰り広げる、この世ならざる世界の虜となり、毎夜毎夜引き寄せられていた。転んだあとの茶店で休憩をしながら脳裏に浮かんだのは、そのめくるめくような舞踊の光景だった。

気づいたら、私はそこで舞踊の手ほどきを受けていた。この店の前で転んだのは運命的なもので、何か意味があるに違いないと感じ、習うことにしたのである。しかし、今思えばそれは、転んでもタダでは起きないぞという意地だったよ。うな気がする。ともあれ、それから残りの滞在期間、せっせとレッ

スンに通ったが、運動系の才能がほとんどゼロの私は基本の型すら覚えられなかった。要するに、ムダ骨、である。

けれど、転ぶ前と転んだあととは、確実に私の人生は変わったのだと、数年が経過した今、しみじみ思う。人や、風景との出会いもあれば、思考の流れもいささか変わっている。転んだあとから現在までに起こった事は、もし転ばなかったら、果たして起きていたかどうか。その少しの変化が、延々と今に続いているのだと思えば、やはりあの時転んでよかったのだ。ならば遠慮はすまい。これからは、堂々と転ぼうと思う。タダで起きるか起きないかは別として。☺

ウブドの坂道の こちら側

ながみ のり
中上 紀
作家